



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

1 1968年川端康成はノーベル文学賞を受賞した。これはそのときストックホルムのコンサートホールで行われた記念講演の全文である。題して「美しい日本の私」。

川 端は日本の伝統文化の絢爛を次々に語り紡ぎながら、日本文化のアイデンティティを浮き彫りにしてみせる。それは西欧のそれとは決定的に異なるものであり、時には「お前たちには分かるまい」と挑発しているかにさえ読み取れる。

ま ず禅である。「瞑目して、長い時間、無言、不動で座っているのです。そして、無念無想の境に入るのです。『我』をなくして『無』になるのです。この『無』は西洋風の虚無ではなく、むしろその逆で、万有が自在に通ふ空、無涯無辺、無尽蔵の心の宇宙なのです。・・・論理よりも直観です。他からの教へよりも、内に目ざめるさとりです。真理は、『不立文字』であり『言外』にあります。・・・」

そ してその形となって現れたもののひとつとして一休和尚の和歌を紹介。「心とはいかなるものを言ふならん 墨絵に書きし松風の音」

さ らに花道の名家池坊専応の口伝を引用「ただ小水尺樹をも

って、江山^{おもむき}数程の勝概を現はし、暫時傾刻のあひだに、千変万化の佳興をもよほす」

そ して庭園造りの基本概念の紹介。「日本の庭園もまた大きい自然を象徴するものです。西洋の庭園が多くは均整に造られるのにくらべて、日本の庭園はたいてい不均整に造られますが、不均整は均整よりも、多くのもの、広いものを象徴出来るからであります。・・・『枯山水』といふ、岩や石を組み合わせるだけの法は、その『石組み』によって、そこにない山や川、また大海の波の打ち寄せるさままでを現はします」

そ して茶道。「『和敬清寂』の茶道が尊ぶ『わび・さび』は、勿論むしろ心の豊かさを蔵してのことですし、極めて狭小、簡素の茶室は、かへって無辺の広さと無限の優麗とを宿してをります。・・・茶室の床にはただ一輪の花、しかもつぼみを生けることが多いのであります。冬ですと、冬の季節の花、たとへば『白玉』とか『侘助』とか名づけられた椿、椿の種類のうちでも花の小さい椿、その白をえらび、ただ

一つのつぼみを生けます。色のない白は最も清らかであるとともに、最も多くの色を持ってあります。・・・」

川 端康成はこれらのほかにも自然を素朴に歌い上げた道元禅師、月を友とした明恵上人の歌や、良寛の生き様などを縦横無尽に紹介しているが、あの冷静な彼が熱をこめて世界に向かって語りたかったことは、西欧文明が自然を客観化して獲得した科学の力でもって自然を取奪し、今まさに食い尽くさんとしているのに対して、日本の伝統文化は自らを自然の一部として同化し、自然を同等の主体—友とする文化だということではなかったのか。

し かしあれから40年の後、彼の舌鋒はいま西欧化してしまった我々日本人に向かっているように思えるのだ。

な お、本書にはサイデンステッカーの英訳が付いており、最も英訳しにくい日本文化に関する種々が、英適な日本文学者によっていかに翻訳されているかが興味深い。

国 語、英語の先生のみならず、教育の世界で日本の伝統文化が問題になっている昨今、教壇に立つものは一読しておきたい一冊である。ちなみに本書は、刊行以来55刷を重ねる超ロングセラーである。



◀『美しい日本の私—その序説』
川端康成著
サイデンステッカー英訳
講談社現代新書0180
定価（本体660円＋税）